

ダメット意味理論における有意味性の射程の検討

三上温湯 (Mikami Onyu)

首都大学東京人文科学研究科

マイケル・ダメットは、自然言語の意味の理論のプログラムを推進し、その哲学的基礎について、全く新しいアプローチを提案した。彼によれば、意味の理論が説明を与えなければならないのは、言語に習熟した話者が、当の言語について持っている意味理解・知識である。そして、彼の意味理論の主題であるところの意味理解・知識は、当の言語を適切に使用する実践的能力にほかならない。もし、ある人が、当の言語の習熟話者であると認められるのであれば、その人がその言語を用いてできることとは、当の言語を理解しているすべての人が、そしてその人達のみができる何事かである。したがって、意味の理論が説明を与えなければならないのは、言語習熟話者が持つ実践的能力である。

以上のように見てくると、ダメットの考えは、ごく当たり前にも思えるが、しかしそもそも意味理論が、一定の能力に存するという彼の特徴的考えは、それ自体として見たとき、どのような根拠を持つのだろうか。普通指摘されるのは、語の意味とは、その語が顕著な仕方では登場するような言語ゲームにおけるその語の役割（用法）そのものだとするウィトゲンシュタインの（大まかに言って、中期の後半くらいから、後期において、前面に現れる）考えからの影響である。実際（当日の発表で取り上げるが）こうした見方を表明している（そしてダメットへの影響が明白に見て取れる）ウィトゲンシュタインの発言は豊富に見出される。

このときさらに、ウィトゲンシュタインが「用法(use)」「適用(application)」の概念と、「検証(verification)」の概念とを密接に結びつけていたことも考慮に入れてよいだろう。彼は、きわめてしばしば語が（一定の言語ゲームの中で）まっとうな「使用・適用」をもつことと、その語（を含む文が）適切な検証条件を持つことをほとんど同一視していたように解されるからである（これについても当日典拠を示す）。この場合の「検証」の概念を、（論理実証主義者がおそらくそう考えたような）感覚知覚による実証という意味で解するのは、適切ではない。ウィトゲンシュタインの趣旨は、ある語（を含む文）がまともに適用できるとは、少なくとも、その文が確かに成立しているときには、そのことを我々（習熟話者）が知る可能性が、（何らかの仕方では）確保されていなければならないということであり、文の有意味性を、感覚知覚の確実性へと還元するといった考えは一切認められないからである。

ところで、このような検証の概念は、ストレートに突き詰めると数学（とりわけ、構成主義的数学）における証明—それは、証明された命題の正当性を決定的に確立するものとみなされる—の概念に帰着するようにも思える。実際、ダメットはまさにそのように考えた考算が高いと言って良い。しかしこれは、ウィトゲンシュタイン解釈として見た場合には、必ずしも適切であるようには思えない。というのも、ウィトゲ

ンシュタインは、一般に文の意義をその正当化可能性に存するかのようにみなしたとは到底考えられないからである。むしろ、実情は次のようであったと考えられる。すなわち、ダメットは、語の意味をその使用だとし、さらに習熟話者の言語理解はそうした使用を行う能力にあるという点で明白にウィトゲンシュタイン的でありつつ、使用のより詳しい特徴づけを正当化ということにあるとみなした点ではむしろはっきりと、フレーゲの意義観を受け継いだと考えられる。

本発表の立場は、こうしたダメットの行き方に対し、改めて、元来のウィトゲンシュタインの考えにより近づけた形における意味理論を構想する余地があり、また、必要なのではないかというものである。より具体的には、強い形の直観主義論理を意味理論の基盤論理として採用するダメットに対して、むしろ、ある種の（片側決定可能な）無限選言や、無限連言を許す幾何学的（双対幾何学的）な論理を基盤とする（おそらくよりウィトゲンシュタイン的と言って良い）意味理論の可能性を追求したい。